

女性部ニュース

2013年1月15日発行

No. 65

発行責任者 三木 啓代
東京都新宿区上落合 2-28-7
落合高山ビル4F
電話 03-5338-8988
FAX 03-5338-8981

自治労東京都本部女性部第21回定期総会



2012年11月17日中野サンプラザで第21回都本部女性部定期総会が開催された。

総会議長に、八王子市臨時・非常勤職員組合の門倉代議員、北区職労の文屋代議員を選出した。三木女性部長から「女性の立場から職場での問題等について大会での活発な発言をお願いしたい」という挨拶の後、来賓に宮本都本部委員長、本部女性部小柳副部長、都本部青年部菅原書記次長の挨拶を受けた。

樺山事務局長から2012年活動経過を報告し、3名の代議員から発言があった。

1、葛飾区職労坂本代議員からは、現業職場の公共施設総合維持管理システム導入に対して、PTを設置し委託の可否について分類作業を行っている。任用問題では、統括技能長6名中女性は1名、各職場では技能長、技能主任の女性の任用数は上がってきている。保育園用務は全員女性で今年度、技能長に2名が任用され、7名の技能主任と共に新たな用務職の在り方を模索している。

2、北区職労丸山代議員からは、昨年から継続している気仙沼市復興支援について、組合員から寄せられた物資を、1泊2日の復興支援バスツアーに32名が参加し、気仙沼市職労に届けに行った。到着後は、気仙沼市職労書記長から東日本大震災の経過と課題について話を聞き、翌日は陸前高田市に視察に行った。東京大震災を想定した際、共通の課題が多く今後の取り組みに役立てたいと思った。

また、健康教室と職場討議を合わせた交流会を開催し、権利内容の学習、要求作りの根拠として職場実態調査及びデータ作成の必要性、自治労女性部の権利点検調査に独自項目を加えての取り組みをした。都本部女性部として各単組の取り組み状況、制度実態などの情報の提供をお願いしたい。

3、東村山市職労太田代議員から、現業職場は市当局の定年退職不補充方針による委託化が進み職場が減らされている。特に現業の女性職場は減り続け、定年退職後働き続けられる職場がない。しかし、職場の確保に向け保育園調理職場及び再任用配置に向けた取り組みを開始し、結果として、定数1名の増配置及び再任用職場の確保ができた。

樺山事務局長答弁

- ・PTの立ち上げについて、今後も引き続き情報の提供をお願いしたい。
- ・現業の女性が働き続けられる職場が非常な勢いで狭められてきている、このことを受け止め、女性



部も都本部現業評議会と共に運動を進めていく。

- ・気仙沼市復興支援の取り組みについて敬意を表する。震災及び復興について風化させず、運動を広げる取り組みが必要だ。

経過報告は拍手で承認された。

第1号議案2013年度女性部運動方針案について、三木女性部長から提案され4名の代議員から発言があった。

- 1、多摩川競艇労組小川代議員から、自治労公営競技評議会に結集し、臨時という不安定な身分問題の解決と賃金・労働条件の底上げの闘いを続けている。2012年1月、多摩川競艇場の施行者の青梅市当局から賃金の条例化に向けて協議の申し入れがあった。2月、大幅賃金引き下げを提案してきたが協議を続けている。2000年以降、約30%賃金引き下げがあり、条例化を逆手に取った極端な賃金引き下げは認められない。現在の労働協約に基づいた賃金・労働条件の条例化を基本に今後も協議に臨む。さらに身分問題の解決の転換点として、今後は地公法第22条5項の臨時という立場で青梅市の一般職との均等待遇と処遇改善に向けた闘いを、青梅市職労や青梅市労連と連携し取り組んでいく決意だ。
- 2、自治労都庁職福祉保健局支部藤内代議員から、今年も11月10日から14日まで12名で都本部・自治労都庁職共催で取り組んだ韓国「ナムムの家」訪問スタディーツアーについて、日本軍「慰安婦」問題の解決に向け、当事者の声を聴き歴史認識を深め女性の人権・反戦平和を求める活動として、今後も都本部として継続した取り組みをしてほしい。この運動を、牽引する役目として都本部女性部が中心となしてほしい。
- 3、練馬区職労根岸代議員から、総会の前の方針（案）全文をニュースで知らせてほしい。労働派遣法の改正について不十分だったという点を補強したい。労働の規制緩和で、財界の扱いやすい派遣という働き方ということで現在のような非正規労働者が増えた。今回、改正されるが骨抜きで不十分な内容であり非正規化は止まらない。更なる運動の強化と職場の課題とあわせた身近な取り組みを進めてもらいたい。
- 4、立川市職労廣瀬代議員から、女性部を2年前に発展的解散したが、女性部が進めてきたことを執行部で続けている。嘱託職員として執行委員になり、正規職員と一緒に活動できるか不安だったが協同している。1年雇用だが65歳定年を勝ち取っている。業務検討委員会を立ち上げ繁忙になった職場状況を改善に向けて話し合っている。都本部の臨時非常勤協議会で副議長をしているが、何でも相談できる場でもあるので、是非広めてもらいたい。

三木部長 答弁

- ・多摩川競艇労組の取り組みに女性部としても共闘していきたい。
- ・韓国「ナムムの家」訪問スタディーツアーは女性部としても中心になって推進していく。
- ・派遣法の改正の不十分さについては今後も取り組みを進めていく。
- ・方針（案）の全文掲載事前配布は今後検討していく。

運動方針は、賛成24名、反対5名で可決された。

続いて、「脱原発とエネルギー政策を転換させる決議（案）」、「大会宣言（案）」が提案、承認され、最後に三木女性部長の団結頑張ろうで閉会した。



講演「放射能汚染による健康影響」を聞いて

女性部総会参加者

2012年11月17日中野サンプラザで開催された第21回女性部定期総会前段記念講演を、最後尾の傍聴席で聞く機会を得た。

講師は高木学校の崎山比早子さん。医学博士としての淡々とした口調に、誠実さと冷静さを感じた。高木学校とは、「市民科学者」として一生を貫いた核化学の専門家・高木仁三郎氏（故人）が1998年に立ち上げたNGO法人である。言わばそのお弟子さんたちが、医療被ばくを含む放射能リスクを説いて回っている。立川市職労でも昨年、高木学校の別の講師による講演会が開催され私も参加した。

一個の受精卵から分裂・増殖・分化を繰り返して、今や六十兆個の細胞から成り立っている私たちの身体。その細胞・身体的设计図がDNAで、複製されていくDNAは親と全く同じで、何度複製を繰り返しても元のDNAと同じものになるという。

しかし、放射線はこのDNAを損傷するのだという。分子が連鎖する力の一万から二万倍もの力で分子を断ち切るのだ。こうして放射線によって引き起こされた複雑な損傷を、細胞が修復しようとするが、間違った修復を引き起こしてしまうということが「ガン化」というもので、変異が細胞に蓄積されていく。たとえ低線量被ばくであっても放射線の危険性は蓄積されていく。日本は医療被ばく大国でもあり、世界のCT機器の三分の一が日本にあるという事実。日本人は他国の二百倍から四百倍もの線量を浴びており、皮肉にも実際のところ年間一万人がこれにより発がんしているという。

脈々と生命の情報を伝えてきたDNAの二重螺旋。神秘とも言えるこの連鎖を目の当たりにして、人間はそれ以上に何を優先しようとしているのだろうか。産業なのか、それとも経済優先なのか。生命と天秤にかけられるものなど是在はずがない。それを考えたとき、改めて脱原発という唯一無二の結論に到達する。

崎山さんの講演は、静かに、しかし強くこのことを訴えかけてくださった。

福島警戒区域等、避難区域住民対象の小児甲状腺検査では、今春、35%の子供の甲状腺に結節や嚢胞がみついているという。別の情報で、今秋の調査では50%に増えたと聞いた。特に女兒が放射線への感受性が高いという。当初、100ミリシーベルトまでは安全と言っていた政府。しかし、低線量被ばくの影響は確実に数字に現れてきている。

人と核とは共存出来ないということは明らかだ。命を尊ぶ、安心・安全な生活を取り戻し、推進していく必要を確信した講演であった。



日本軍「ナヌムの家」訪問スタディツアーの報告

都本部主催の韓国「ナヌム（分かち合い）の家」（日本軍「慰安婦」のハルモニ（おばあさん）が共同で暮している家）訪問スタディツアーは、11月10日から14日まで初めて4泊5日の日程で行われた。

1、2日めは、陝川（ハプチョン）で「韓国原爆被害者」の方々とは交流した。ソウルから車で約6時間、世界陸上が開催された大邱（テグ）からは約2時間の自然豊かな山あいの町だ。陝川から広島へ移住し、戦後様々な理由で陝川に戻った方々が多く原爆被害者として登録されている2661名のうち462名が陝川出身のため「韓国のヒロシマ」と呼ばれている。

1日めは、韓国原爆被害者2世患友会の方々と交流した。楽しく会食した後にその日の宿で記録映画を見た。明るく振る舞っていた会長の息子さんが重度の障害があるという映像が映し出され胸が詰まる思いだった。2日めは、韓国原爆被害者1世が暮らす大韓赤十字社陝川原爆被害者福祉会館を訪し、

2人の方からご自身の体験を聞かせていただいた。流暢な日本語で、何故日本に行ったのか、原爆投下直後の広島街の状況、恐ろしかった体験、その後の語り尽せない苦勞を話して下さった。今は福祉会館で暮らし安心だという言葉に救われた思いがした。

2日めの午後は海印寺へ。ここには世界記録遺産の高麗大藏経板があり、藏経板殿に収められている様子は圧巻だった。

3日めは、元日本軍「慰安婦」の方が共同で暮らす「ナムムの家」を訪問した。まず、敷地内にある「慰安婦」歴史資料館で、日本軍の蛮行による史実を学び、騙されたり強制連行されて「慰安婦」にされたことに憤りを覚えた、その上、ハルモニたちは戦後も韓国社会で差別され辛い人生を歩んできていた。現在9名の方が暮らしていますが、平均年齢は80歳を超えている。お話の中で、日本の「右傾化」を非常に危惧していることが印象的でした。



4日めの午前中は、西大門刑務所歴史館へ。ここは、日本帝国の侵略、支配下の時代の「刑務所」で、韓国の「独立」を叫ぶ多くの者を収監した。獄舎が当時のまま残されその非道な状況を実際に体験し、獄死した多くの民衆の気持ちを受け止めた。また、「韓国のジャンヌダルク」と称えられた「柳寛順(リュウクオァンスン)」烈士などの独立運動家の展示もあり、日本語ガイドの丁寧な解説で理解が深まった。

午後は、日本軍「慰安婦」制度の犯罪性と犠牲になった女性たちの歴史を記録した、「戦争と女性人権博物館」へ。多くの支援者、支援団体、自治労都本部も建設資金を寄付し、2012年5月に開館した。現在も世界の紛争地域で起こっている「戦時性暴力」について告発し、女性の人権擁護の立場から平和を訴えています。

次に仁寺洞(インサドン)周辺の「3・1独立運動」の史跡をフィールドワークし、ダプル公園のレリーフなどを見学しました。市民が憩う公園内に歴史が刻み込まれ後に受け継いでいく重要性を感じた。

夜は、遠く陝川(ハプチョン)「韓国原爆被害者」の方たちも参加した韓国「被爆者2世」への法的措置を求めた集会に参加した。

最終日は、まず安重根義士記念館へ。安重根(アンジュングン)は、日本では伊藤博文を暗殺したテロリストとしての扱いだ、韓国では、日本帝国からの開放の象徴であり、獄中でも救国の精神を曲げず、カトリック信仰を持ち続け、東洋平和を願った人物として国民的英雄です。記念館は彼の生涯と伊藤博文暗殺に至った日本帝国の侵略戦争の経過、その後の法廷闘争などが展示されている。

スタディツアーの締めくくりとして「水曜デモ」に参加した。日本大使館前で、日本軍「慰安婦」達も参加し毎週水曜に行われる集会だ。当日は最低気温がマイナス1度と非常に厳しい冷え込みにも関わらず、2人の元「慰安婦」が参加していた。私達も日本軍「慰安婦」への日本政府の公式な謝罪と補償、歴史教育を通じた再防止を訴えた。

見学した場所を中心に報告したが、宮廷料理や精進料理、家庭料理などキムチや焼肉だけではない韓国の様々な食事、仁寺洞でのショッピング、伝統芸能も堪能した。

女性部として日本軍「慰安婦」問題の解決に向けて運動を進めます。来年も開催を予定していますので、ぜひ参加して下さい。

